

雲道は山裾をずつと先に鐵橋のありて汽笛
 ゆきぐもからまつ並木歸農する家がたつ
 しんじつ手をあはす事も、多日の薔薇一輪
 雲が消える藪の水仙日に日に忘れゆくはよし
 おちあうてせせらいでゆく
 わらびは手に一ぱいとなつてうぐひす啼いてゐる
 茂りに茂る山の寺の僧はひげそつてゐる
 疎開もうとまれる頃の秋茄子の二つ三つ
 夕立前の風がきてとうもろこしのちよつぴりと赤いヒゲ
 雨の中きて田植祭のよもぎ餅をたうべ
 月の影するいちじくの葉が初盆
 ぶな林日中は夏の日さしてゐる
 山深し雷青茅からのうぐひすきいてゐる
 とうきびの穂待つた登山バスの降りて来たところ
 網の目が涼しい小えびをすくつた
 観音さまはわらやの中たはぎは風に咲いてゐる
 月の出てゐるやうな明るさが木の中鉦叩き
 えんてん煙の出ない煙突で雲が浮いてゐる
 日の中ひまわり草とつてゐられる母で
 夕月やなぎおしわけて舟が置釣してはゆく
 あさがほまだ咲かない遠くかじやの音が夜明
 戦の濟んだ肥をやつてゐる
 雲の影がだんだん鳥の胡麻の花も影の中
 朝は青葉のにほひ、家のよこ竹林掃いてゐる
 朝日くまなし雲雀の聲

齋藤てつ人
 日向野秀策
 皆川蓼二
 田中登貴枝
 佐々木行人
 洲河伸一
 小西佛舍利
 山田梅軒
 原 實
 山岸稻青
 鳥山洞庭子
 岡 浩二
 松田一男
 青木青夫
 泉 丈
 横關碧樓
 村田白鶴
 金平二火

ある。こゝに「道」といふものがある。
 だから、これは西洋風の「藝術」とはちが
 う。いはゞ「藝道」といふものである。そ
 れならば、たゞの「藝」かといふに、たゞ
 の「藝」(技藝)ではない。だが所謂「藝」
 とは全く違ふものでもない、「藝」から出
 て「藝」をこえてそれが「道」にまではい
 つたものである。こゝに「藝道」といふも
 のゝ理念がある。俳句といふものも、要す
 るに「藝道」である。だから、西洋風のジ
 ヤナル論を以て、俳句を切らうとしたとこ
 ろで、切れるものではない。
 俳句をたゞの藝術として考へてはいけな
 いといふことに就ては「層雲第二句集」の
 巻頭論として私は「藝術より藝術以上へ」
 といふ一文を書いてゐる。
 俳句の精神は單なる藝術ではない、俳句
 は單なる詩ではない。俳句は藝術以上に
 出なければならぬ、私はこゝに此の事
 を主張する。——大正六年七月稿——
 單なる藝術でないとしても、「藝術以
 下」の路であつては、これ「第二藝術」
 と評せられる路である。私たちは「藝術
 以上の路」を行く者、少くとも、それを
 行くことを以て「行ずる心」とするもの
 である。

霜、大根を三本ほどぬく

北田山口彦

うみのあをさにしろいなみ、しろいききして牛車を通る

武田桂

雲、うんとおりてうんとおつてしぼらくなつてゐるべ

篠崎鳩坊

あのととき別れたきりのはぎの咲く道

品川幸一郎

月夜の車コロロンコロロン引いて戻る

品川幸一郎

垣根みづいろの朝顔咲いて今日から勤めに出るといふ

品川幸一郎

炎天の大きな魚を一匹賣らうとするこゑ

品川幸一郎

合歡の葉ねむるころの合歡の花かな

品川幸一郎

はれると雲のゆく方へゆき桐のさく空

品川幸一郎

燒跡畫が少しひまなパスが通り秋の白雲

品川幸一郎

ねるとき月のあかるさ妻が針をおさめてゐるのも

品川幸一郎

更けて沖でてんめつしてゐるのも春がぬくい雨になつてゐる

品川幸一郎

そよ風もまつりの、ちようちんに灯を入れるまへ

品川幸一郎

平和になつてふつぬしの命さまたけみかつちの命さまのお顔仰いでゆく顔

品川幸一郎

日やけてやせた體に浴衣の白さばかりがふるさと

品川幸一郎

砂に花の月曇る

品川幸一郎

風があらしめく宵のほろ蚊帳

品川幸一郎

草が秋のそらがあさの線路にそうて出勤する

品川幸一郎

鐵の建物が秋らしくなり男たち爐から眞赤な鐵をとりだす仕事

品川幸一郎

かやに出るかぜがことしはこども三にん

品川幸一郎

かやつつてやつて子どもに夢がある

品川幸一郎

門に一の唐黍には夕べの風が出てしようちう一杯

品川幸一郎

みぞそば溝に咲きあふれ道に咲きひろごり

品川幸一郎

きのふよりもけふは涼しくて海が雨

品川幸一郎

籠にとりてトマトの朝焼けしてゐる幸福

品川幸一郎

京都にて

井泉 水

京都の初冬はやはり好いなア、とおもつた。初夏の頃に来た時は、一晚、泊つただけであつたが、今度はめづらしく、四日も泊つてゐたので、何となくおちついた氣持になり「自分の京都」といふ二十年もまへの氣持が新しくよみがへつてきたのかもしれない。宿は木衣樓の心やすい家といふ好い宿が高臺寺の下にとつてあつた。私が住んでゐたのは、劍の宮で、高臺寺と同じ東山のすそであつた。朝夕にきこえる大佛の鐘や東福寺の鐘の聲も、私の氣持をしみじみとさせたやうである。

時雨としても借りて出てふりつる傘

私はもちろん、洋服に靴の旅支度だつたが、折から時雨季節だつたので、一寸外へ出るのに、傘をかりたり、下駄をかりて出たりした。木衣樓の家がイキナ家なので、シヤレた下駄をつつかけたまま、私は知人へ、行つてほがらかに笑はれたりするの

子供が子供つられてゆくお祭り
 とんぼとんぼ、がた馬車がたがたのせてもらうてゆく
 ぼんとはねる栗を灰に入れとく
 退院しても毎日通ふ病院のひまわりの花
 枯木にばらばら星がある月の出
 多となりていかのあしたべられてゐる
 家の中板の間にもまつりの月が明るい
 繪かきとかたりすずしくてうちわの繪など
 きついうみなり三級酒お肴ありますといふ
 朝は小降りになつて燈臺のみち白い貝がら
 としよりひとりだけの垣に朝顔みんな種になつてゐる
 通るといつもある老母がある秋の陽が菘蟲
 放牧の牛でその仔牛で霧あめ
 この頃菜根譚會心のことば黍の風ふく
 海風は涼しくなんにもきかずに別れはしたが
 月夜湧く水厨の暗いところとると鳴り
 ベッドに眼をとちてキリスト月にむいてゐる額の繪に日がけり
 焼あと映畫館が建つて卵色にぬられてゆく夏の空が青くて
 かねがなる神學校は丘に町はづれ夏の夕そらを映してゐる川
 夕燒雲やほのかな月や草とりの笠でかへります
 涼しさは灯火にぬれてゐる竹、ふりたててゐる
 ひでりつづきの月がうすうすと藏のとびら
 空が天の川になつてゐる籐椅子
 出勤にちよつと間がある娘さん畑のトマト
 灯を消してからの月が屋根のまるいなんきん

堀切春扇

小林未鳴

照井燈光

長澤元茶

荻原 荻

三好米子

森田十雨

遠藤虹水

増村辰郎

白井正夫

旅を忘れたやうなのどかさであつた。

朝は圃にささの葉に日のさし、ささ鳴き

宿である家は、むかし或る高官の隠宅だ

つたとか、それで庭に面して、小さな離れ
 があつて、それについた手洗場には、いつ
 も水のしたゝる音がして、私の昔の橋畔亭
 を思ひ出させた。こうしたところに籠つて

ミッシリと何か書きたいと思つた。

京はお火焚ごろの小さな店の青いみかん

その或日は「隨筆」主催の坐談會があつ

て、岡崎の吉富樓に行つた。この日もしく
 れてゐたので、車をたのんだ。ほろのある
 人力車も、このごろは昔のやうに見かけて

来たが、京都に、これがやはりうつりがい
 いやうだ。前面のタレにはめてある小さな

四角なセルロイドを通して、智恩院の古門
 が見え、疏水べりの柳の木が見え、平安神

宮の大鳥居が見えたりして、走るといふほ
 どではなく曳かれてゆく。吉富樓の門は、

一般のお客を入れないためにいつも閉ぢて
 ある、それを明けてもらつてはいつた時は

てんぐさ探る海女の盞か日本海は青くてひろし

大竹大三

へちまの花額、字飛龍もふるくすすけてゐる
橋があつて青い田んぼ海風いでゐる
目か軒すでに秋のうすいとんぼうのはね

青 應香

ひとしきり降つてきた雨が窓の灯のとどいてゐる竹の葉
ふとみあげた空に晝月があつて自由市場の雑踏
明るい月が無花果の葉らしくて今夜あたりは涼しい
母とお寺まいりしてからの甘酒屋で京都の秋

波多野翠江

驛からの道薬師寺へ春の畑してゐる
戦終りての青葉に肥してゐる冬
先生お久しぶりな壺に秋草挿してゐる
砂に咲いてゐるので星が涼しい浪音

水谷青史

通る人にとろてん冷やしてある山の障子白く住む
山のしづけさ青いおちばあさ掃いてゐる
しうかいどう、陶房は朝の日のさし入り
起きいでてけさの涼しさ魚の泳ぐさへ

松村邦夫

少女洋服を着かへるとお琴へ行つて参りますトマト畑瓜畑
まだ明るいに電気ともしてゐる農家の臺所夏の列車さびしく
ひとりと砂がこぼれる春

名雪理輝

いよいよお盆の月の明るさはごまの花
降つて明けると木の葉がかはいてゐる、かぜ
朝日が雲を出てすこし冷たい空気である野菊
雨があがると西があかるい山の松の木

高崎貞之

焼けあつとふきの
星が空いつぱいの星になる

時雨おもおもはれぬほどの大雨になつて、
川についた奥の部屋は水がザツザと小流に
は似あはぬ音を立ててゐた。その雨の中を
新村出氏が見えた。氏は、途中、雨があま
りひどいので引きかへさうと思つたが、け
ふは久しぶりなので、おして来てしまつた
と云はれた。ほんとうに、久しぶりでお目
にかゝれてうれしかつた。まだ、主催者側
も雨の爲に見えないので、それ以来の追憶
談さまへ、雨の音もまた楽しかつたので
ある。

x

また或日は、京都俳句會といふ名で、無
隣庵に集つた。無隣庵は故山縣有朋公の別
荘で、公が自分の意匠に依つて作つたとい
ふ庭がなか／＼佳い。地坪は三角形になつ
て、その頂點の方へ視線が奥まつて引きつ
けられるので、大さう奥ふかい感じがする。
疏水の水が左から入つてきて、右へ流れて
去る、これが奥へ縦に引かれる氣持を横に
開かせる作用をなして、奥の方の木立の暗
さと、前方の芝生の明るさとが、明暗の對
照をこゝろよく調和させてゐる。こまかな
技巧がなく、やゝこしい石組などもなく、
おほらかな氣持の庭園ではある。

からつと上ると空の月が六日頃の青田
太陽しづかなりだくりゆうのむかふところのいちづなる
大根の種と白菜の種と緑の風が秋

佐藤 専子

桔梗かるかや淺間山を近く疎開してゐる
青葉に水車廻してゐる水の流れてきてゐる

落窪京太郎

かいこん終つて女學生そばの花一本道、橋わたつてゆく
松に夕日いつもおしよるさんはおるすのかなかな
雨になる風になるきびの葉がときどきいなづま
たまご生まなくなつた鶏と眼のわるいおばあさん暑さがぜつちよう

田中 星々

松油がま跡芒の穂雨のはれた月夜である

植田市籠

芽麥畑朝日さし學校が見えて生徒ゆく
家のまわり田へゆく水音の聞ゆることとなり朝晩
踊りばを離れた木が一本月夜

上柿小平

降つて芽が出る晴れて人出となる
母のお灸の歸りのつんできた此のせり
氷がとけると日が水にある刈田一めん
産婆さんの自轉車がくるくと通るお月さん

吉澤 稻市

蓮の花の白いのより赤いのが田舎田舎して團扇かしてくれる
目のさめるやうな簪草が一株あるその家の雨上つてゐる
道に百日紅が咲き如何にも夏らしい娘が日傘さして通る
川へ下りる梯子のある川へ下りてゐる秋の日

藤澤せいじ

日がればたけのいもの葉かみなりがころげる
あつかつた一日の日をいれてあしの葉のそら
日ざかりの南部街道を前にして家のあがりがまち
すでに秋ぜみのなく山の町の山のそそりたつ

句會としては京都として、めづらしく三

十人あまり。泉の會の人達や大阪からの同

人や——天津から無事に引揚げて來た塚田

虹子や——新聞で見たといふ新しい顔も見

えた。京都には古い歴史をもつ泉の會とい

ふものはあるが、それとは別に、若い人た

ちを主とした研究的の會が一つ新しく發足

するのによからうといふ談から、菊の會と

いふ名を私はつけた。菊は折から十二月、

季節の感じでもあるし、新憲法發布といふ

記念すべき時に際會した、それを記念する

意味でもある。又、少々もつたいをつけて

云ふと、菊といふ花は、植物學上から云ふ

と、一りんの花が一つの花ではなくて、多

數の花が集つて出來たといふ形の花であ

る。仲好く集るといふことに菊の花の二つ

の理念がある。それから、菊といふ花は強

いもので、たとへ放つておいても、いつま

でも根が残つてゐて枯れることがないが、

手がければ手がけるだけ美しい花がさく、

この手がけることの樂しみが、いはゆる菊

作りの味ひでもある。此の氣持をもつて、
京都の菊の會を育ててもらひたいものであ

羽後と越後

萩原井泉水

○羽後とこゝろぐ

句座盛會 沼は あす見ることにして 梨を むく(追分にて、九月廿日)
道は 梨ばたを 沼へ ゆく 晝月が 松の 林に(九月廿一日)
りんごは かはのままくふ 彼もたれも たのしく その中の 女性(九月廿二日)
鳥海まで 夕日にして 田にある 稻 塚にした 稻(象瀉にて、九月廿三日)
ホクの辰郎 うたの路光と 梨もつて あひにきた
むかし 八十八瀉の 稻のほ波である 海にまで
げに 秋田に通ふ道はるかに もくげ さいてゐる ほこり
ここに 芭蕉の句の あまがつまと 秋の明星

○越後とこゝろぐ

其後は、 鎌倉に住んでゐた君と この國の 梨のところ(村上にて大三に、九月廿四日)
もくせい、 しようじ 白くして 待たれたらしく
稻は 豊作の、 梨は 満月のごとき これを、 むく
梨 むいて 泊つてゐる 梨 もつて 人訪ひ来る
書だなど 君の机の 一りんの菊、 そのへやに とまる
梨 むいて マッチ さじてなど もて なされる(空史に)
教べんを くわにかへてよりの 君のはたけか、 けさはつしも(九月廿五日)
佐渡は霜はれの 波のうへ 長きいくさは おわり(汽車中にて)
旅に 霜がきても 日中はぬくとく 鯨波あたり
かぎかりて 木食上人 おがんで 雨は しぐれか(柏崎にて)

月夜海のしづかさは内海ぞひのへいの中の青いいちじく
ふらないで雲の星になつた宵の川音
あき口の陽がちよつと色ついた米みづにさしてある匙
月夜も水車はことりことりと葉が散る
わらぶき小屋の水車にも冬がやつてきて椿の葉のつや
うちでとれたにんじんのすなほなのも二又のもほしておく
旅からすのやうなからすがあるいてある麥の芽
竹箒ではくほどの雪で朝の日がさし正月三日
ことしも月のよい枝豆は胸にのせて食べることか
日盛り、鉦がどむらひの列にしてゆく
さゆのゆげはなにふれるふゆよにてとんぶく
もう落葉しなくなつた朝月を掃く
つらら、月がまひるのやうで
青いスポットにうちふしたをどり子の、死といふやうな時間
りすのやうなこどもたちでただもう光のらんはんしやです
石が秋が冬になるヶちくもり
のぎくさいてちつてゐるのがつきよあかるく
つきがあかるいのでねられないつきをみてゐる
秋が多にならうとする水の中が幻燈のやう
別れることをかいたてがみ、封をすると切手をはる
落葉、てをにぎられてやさしいことばをきいてゐるばかり
女をつれてくちをきかないでゐる夜になる波
遠山のみえる五階から下り家へかへる電車みち横切る
秋いちんち晴れてた繪具箱のいろがごちやごちや
月がでて月あかり處女である胸のふくらみ

菅崎道雄

瀧山重三

平松星童

岡野宵火

つたあとの、棒きれのやうな木の枝をとつ
ても、見る目を以て見れば「花」と同じや
うに美しい。これが俳句の目を開くといふ
ことである。落葉をひたむきにきたない物
と思ふ目には詩がない。尤も、何もかも自
の然まゝに任せよ、ではない。葉が落ちれ
ばこれを掃くことも亦、人間としての自然
であるが、さうした後には又落ちてくる葉の
自然にも亦、美しさがある。

掃いても掃いてもちる葉のいぬころ

呵歩

この句が前日の俳句會にあつたので、そ
の句をあけて、私は談をした。四條通りの
人通りも更けた時刻を、呵歩と卓郎とが途
中まで私を送つてきた。電光のあがるいウ
インドの中にかざられた京染物の金糸銀糸
や、アメリカ風の新しい家具類や、四條通
りは昔のやうなはなやかさに戻りつゝあ
る。あまいもの屋の看板もずいぶん見うけ
る。だが、名物の「八ッ橋」や、「がまぶ
ろ」や、斗六の「栗なつとう」などが出そ
るふのはいつものことだらうか。宇治の茶に
京の菓子、これだけはまだ當分のうち、昔
の夢である。

羽後と越後

萩原井泉水

○羽後とところぐ

句座盛會 沼は あす見ることにして 梨を むく(退分にて、九月廿日)
道は 梨ばたを 沼へ ゆく 晝月が 松の 林に(九月廿一日)
りんごは かはのままくふ 後もたれも たのしく その中の 女性(九月廿二日)
島海まで 夕日にして 田にある 稻、塚にした 稻(象瀉にて、九月廿三日)
ホクの辰郎 うたの路光と 梨もつて あひにきた
むかし 八十八瀉の 稻のほ波である 海にまで
げに 秋田に通ふ道はるかに もくげ さいてゐる ほこり
ここに 芭蕉の句の あまがつまと 秋の 明星

○越後とところぐ

其後は、鎌倉に住んでゐた君と この國の 梨のところ(村上にて大三に、九月廿四日)
もくせい、しようじ 白くして 待たれたらしく
稲は 豊作の、 梨は 満月のごとき これを、むく
梨 むいて 泊つてゐる 梨 もつて 人訪ひ来る
書だたと 君の机の 一りんの菊 そのへやに とまる
梨 むいて マッチ さじてなど もてなされる(空史に)
教べんを くわにかへてよりの 君のはたけか、 けさはつしも(九月廿五日)
佐渡は霜はれの 波のうへ 長きいくさは おわり(汽車中にて)
旅に 霜がきても 日中はぬくとく 鯨波あたり
かぎかりて 木食上人 おがんで 雨は しぐれか(柏崎にて)

甲斐と信濃

萩原井泉水

○甲州勝沼と日下部にて

たなのぶどう はちのぶどう 遠山の 端山の けしき(九月二十九日、祝村)
ぶどう たわわなる 寫しをる ぶどうの酒 をつく
ぶどうは ようらくの ごとき 此の老樹なる よはひをきく
空の青さは 手にしたる ぶどう 口にして あるく
ここに むかしの 層雲があつて 君の家の 柿をむく(飯島寛に)
それから 坐談 一問一答の ぶどうの 一つぶ一つぶ
むかし 母と 身延へ これが その道の いもぼたけ、もくげ(九月三十日)
泊りて 町中 水の 流れる けふも 秋晴
空の いろは、 からのかご もつは 栗 ひろひにゆく

○松本在本郷村三才山にあそぶ

ちかみちは、あれど 廣い道ゆく 松の木もみぢ(十月一日、淺間より)
とうげは、あけびがあつて 槍の あたまの 見えるところ
二三人づつは 女學校へ 山おりてくる 朝、野ぎく
家がどぞうが秋の日ぬくい 白かべが、とうげを おりる
水車の 音と 水にそうてある 道の おちぐり
青年みんな ふごや しよいこやもつて 道のおちぐり
栗 むきながら 句は 道ばたにある といふ私のはなし
晴れると 寒くはない 花は 五月といふ さくらの木
なにか 栗らしきつつみ とうげまで おくるといふ 女たちも

明月壇

井泉 水選

鹽田正吾

月に雲の出でてきてまことに松の白さで
ともしびすすしくともつてあるあめ、木のはだえ
かなかなさびしいので句を書いてある
芽が豆をもたげた好い雨でふつてる
あなたからもらつた封筒に入れておいた豆をまきにゆく
ねむのはな日のさしてきて朝のくもとほる
ながそでのうしろむすんでやつてあるのもおまつり
月が暗くて一人二人地藏さまの灯にきては戻る
よしずばりの氷屋ももう秋の海が白浪
巖に白浪のふんさいする烈日
あらなみのいわにつばさやすめてある
菊の花風は海からふく
船の上に初霜がおりた今朝の火をたく
つきよのさかさにつるよてほうきぐさ
百合の花針もつこと教へられてある
雨のあとの匂ふ桃をさげてくるのが娘さんで、朝
木の下きれいなお祭の水がわいてあるに寄
はだかにすればうるはしきとうきびの實のおぼん
どこまでもいもの島で月の光で遠い山も

松岡蒼兒

櫻田輝郎

印南健治

鎌倉だより

井泉 水

すっかり春たけなわとなつた。やがて、
青葉のころも近い。私は、自分のシイモン
が来るので、元氣いっぱい、の氣持である。
この鎌倉も——たとえ初がつおはなくとも
「目には青葉山ほとよぎす……」の一年中
いちばん好い季節がぢきに來るのである。
私はこの冬三月と春二月のあいだは、ど
こへも旅には出なかつた。東京へも、前號
に書いた、俳句翻譯の委員會に出席するた
めに上京するほかは殆ど出がけなかつた。
冬籠といふものは、老人くさい氣持だけ
ども、悪いものではない。仕事は、しけれ
ないほど澤山あるからタイクツといふ氣持
は薬にしたくともない。書齋は日あたりが
わるいので、客間の方に机をすえて仕事を
する。ふいの客が來ると、取りちらしてあ
るのでこまるが、縁側に火鉢とふとんを持
ち出して、客には腰かけて話してもらう。
縁側は日あたりがいゝので、日南ぼつこを
しながら話す。このごろはアメリカ、ハワ
イの社友から、ギフトバアセルが來るので

桐の木大盡夏雲があつて碁を圍んでゐる
さびしくば句を作ればろばろと夏の雲あり
火取虫よ吾が讀むは蘭學事始
ひぐらしが桐の木のてつぺんへ夕月が來てゐる
煙突にそうて月がのぼりそめてからの夜空のいろ
麥芽いくれつも並び白鷄はわたしを恐れぬ
木を伐る音がいちにちたたみあつてゐる山の雪
葉の裏に桃の實のあかあかと日のさして籠につんである桃
朝顔けさはじめて咲いたのが白くて驛長さん
工場地帯となつて青桐のあめの門傘さしてくる
夕雲ながれてながれてお蠶もあがりました
ほすすきあかるいあきのあさまをこえてゆくも
かいこの神へしろきまゆゑなへふかみゆく秋
淺間は霧にしづんでゐる朝の青いぶどう
さびし高原の風は日ざかりの夏草
うの花咲いてゐて遠くに仔馬のゐるのも
ひとと語り話もすんで團扇がとんぼの模様
カツコウカツコウと鳴いてゐてポツンと一軒
海には礁の一つ潮湧いてゐて風いでゐる
小石をいくつもいくつも波紋にして話してゐる
はまひるがほ夕べの砂がさらさらとくづれる
かへでが明るいまどりの泉にしてゐる
つゆけく草履はいてきた橋の上にも鳴いてゐる
今日もばらみ牛がねてゐるすすしい米山の線の日の暮
ポルネオのパナナの話など稻妻が障子にうつり

石井洋音

澤木昭二

佐藤龍

井澤照水

内藤吹星子

小山清

芳香世界一のコナコーヒイを客にもあじわ
つてもらう。氣分がすむ日は、大きな硯
をもち出して、字をかいいたり、畫をかい
たりする。着物もうす着になつたので、筆を
ふるう氣持がのびくとする。かくて、日
々是好日である。

○

社友水谷青史君が村長をしてゐる岐阜縣
海津郡の大江村が中部日本における優良農
村選奨大會において一等賞を獲得したこと
は、主として青史君のおもひきつた決意と
施策とに依ることであつて、じつに青史君
の名譽である。そして、君が青史君である
といふことを以て、層雲の名譽でもある。
推奨された理由は「中部日本新聞」に委し
く出てゐる。

青史君の大江村は、元來、小作農が非常
に多くて、全村農地の半分以上が小作地だ
つたので、村全體が不安定なる經濟状態に
あつた。君は全村を自作農化することを目
的として、まづ自分の所有地六十五町歩を
公價を以て解放した上に、他の地主にもす
すめて之にならした。そのために、百二
三十町歩の土地が小作農から自作農に轉化
することが出來、農地調整法實施以前に、